
学校の怪談

化粧水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学校の怪談

【Nコード】

N4455Z

【作者名】

化粧水

【あらすじ】

とある探偵社に幽霊退治の依頼が…！
依頼をつけた古井戸課長とその部下の山野君。
果たして幽霊を無事に退治できるのか。

幽霊が出たらしい。

古井戸優也はオフィスでバリバリ仕事をしていた。

「課長！幽霊ですよっ仕事ですよっ！」

古井戸は訝しげに顔を上げ、部下の山野岩男を睨んだ。

「なんで幽霊が仕事になるんだ山野君」

「やだなあ、課長。我が探偵社には霊媒部というセクションがあるじゃないですか」

山野は岩のような顔をほころばせて笑った。

確かにこの会社「渦巻探偵社」には、幽霊退治専門の霊媒部が存在する。

しかし古井戸は霊媒部ではない。

「我々は総務部だよ。関係ないじゃないか」

山野は困ったような表情で、それはですねと答えた。

「居ないんですよ。霊媒部」

「何？前々から思っていたが霊媒部はいいかげんすぎるぞ。部長以外は皆落ち着きが無さすぎる」

「はあ。あそこの部長、今旅行中ですもんね」

「ひとりも居ないのか。部長代理は誰だね」

「えー、ふじまるあけひこ藤丸朱彦ですね」

「ああ、いかなあ。アレはいかん…」

古井戸は絶望的なため息をついてぼやいた。

「仕方がない。丁度仕事も終わったことだし、私が行こうかなあ。嫌だなあ…」

「お供しますよ！古井戸課長」

古井戸はしぶしぶ立ち上がり、山野は嬉々としてそれに続いた。

依頼者は近所の小学校の校長だった。

名を須無多真すぶたまことという。60歳。

「いやはや、来て下さって良かったですよ。何でも今幽霊業界で大事件が起こつとるようだな。どの霊媒師も取り合ってくれませんかじゃわい」

古井戸はニツコリと笑った。

「事件に大きいも小さいもありません。困っている人がいればすぐにかけつける。これが私達の仕事のモットーです」

「おお、頼もしい！」

須無多は豚のように肥えた体を揺らして喜んだ。

夜の校舎は不気味だ。

いかにも何かが出そうなうそ寒い雰囲気である。

「課長オ、幽霊退治なんかア〜できるんですかア〜？」

「か細い声を出すんじゃない、山野君。あの校長はもうすぐ定年だというじゃないか。学校を去る際唯一の心残りを晴らしておきたいという仕事熱心さ。素晴らしいじゃないか」

「答えにイ、なつてません」

「だから、できなくても”やる”んだ。それがプロです」

「そ、そんなア〜」

「大丈夫だ、マニュアルがある」

古井戸は『霊媒の手引き』という本を取り出して、山野に見せた。

「なんか、頼りないなア…」

山野は不安そうだった。

「シツ、何かが聞こえるぞ山野君」

山野は周りを見渡した。

暗い廊下。

赤い非常灯だけがポツンと光っている。

か細い声が遠く聞こえた。

「何だろう。歌かな…。この階じゃないみたいだけど」

「課長ー、怖くないんスかあ？」

古井戸はちらりと山野を見た。

「怖いよ。怖いけど、仕事ですから……」

その時2人は見た。

「かつ課長！！」

「うわっ！！」

前方の暗がりには子供が立っていた。

首の無い少女だった。

少女は目の見えない人のように、よろよろと歩いてくる。

古井戸と山野は後ずさりつつそれを見つめた。

首の無い少女はいかにも不自由そうに壁を伝って歩いていたが、つ
いによりけて膝をついた。

古井戸は溜まりかねて少女にかけ寄った。

「か、課長……！」

古井戸はためらいがちに少女の手をとり、しっかりと立たせた。

「山野君、マニュアルを読んで。害のない幽霊の対処方法」

「ええと、優しく説得する、です」

古井戸は悲しく眉をひそめた。

「頭が無いんじゃ説得もできないね」

少女はしばらくの間古井戸にしがみついていたが、やがてぼんやり
と消えていった。

か細い声もいつのまにか、消えていた。

「そんな事が……」

須無多校長は青ざめた。

古井戸は真剣な面持ちで言った。

「そうです。ウワサでは声が聞こえるだけでしたが、私達は実物を
見たのです」

須無多は力ツと目を見開いた。

「わっ！何なんですか、校長」

「その幽霊には心当たりがあるのじゃ」

須無多曰わく――。

5年前、1人の少女がこの学校で殺された。

名は軽井良子。かるいよしこ

彼女の遺体には首が無かった。

首は未だに見つかっていない。

犯人も、未だに見つかっていない。

「不憫なことよのう……」

須無多は腕を組んでおし黙ってしまった。

「そうですね。そんな不幸な出来事があったのですね……」

古井戸も腕を組んでおし黙ってしまった。

山野は泣いていた。

「その女の子は、絶対助けましょう！課長」

「うん。もちろん」

またしても、夜である。

古井戸は優しく声をかけた。

「良子ちゃん」

昨日と同じ場所。

声は廊下にこだまする。

ぼんやりと、少女は姿を現した。良子だ。

良子は古井戸のジャケットをつかんだ。

か細い声が遠くで聞こえた。

「よし、あの声の所まで行ってみよう。山野君」

「わかりました、課長！」

山野は張り切って歩き出した。

次の日。

須無多は、革張りの椅子に巨体を沈めて座っていた。
校長室である。

と、そこへ荒々しく入ってきた者がいた。

「ウガー」

「おい、こら山野君！何で君はいつもそうなんだ。落ち着けて」

「オイ、こら！！エロ須無多！貴様良子ちゃんを襲いやがったな！
チクショーバカヤロー」

山野は須無多に襲いかかりかけたが古井戸が引き戻した。

「君は落ち着きが無いね、山野君。総務部から霊媒部に移ったほうがいいんじゃないか」

「落ちついてられっかア！このロリコン親父が。悲しい顔しottaんは嘘なんかにー！」

須無多はがつくりとうなだれた。

「何とか言いやがれ、この殺人者！！」

「やめなさい、山野君。彼はロリコンかもしれないけど殺人者ではないと思うよ。少女が好きなくせに少女を殺すかい？もし死んだとしたらそれは事故だったんじゃないかな」

「課長ウ」

「悲しい顔も嘘じゃないよ。この人は本当に悲しかったんだ」

校長はうつ、と呻いた。

「あれは事故じゃったー。しかし僕はおそろしくなつて……」
首を切った。

「何で首を切ったのか、自分でもわからん。錯乱しottaのか……」
古井戸は須無多をジツと見つめた。

その瞳には深い悲しみと優しさがこもっていた。

「もうあの少女の幽霊が出ることはありません。私達はこれで失礼致します」

「警察に、つき出さんのかね」

古井戸はやんわりとほほ笑んだ。

「私達の仕事は幽霊を退治することです。そして仕事は終わりました。それだけです」

プロフィールシヨナル古井戸はそう言って小学校を後にした。

「課長、良かったんですか？」

古井戸も山野もあまり元気が無かった。

ふいに、古井戸は詩の一節を口ずさみ始めた。

「その空をみながら、また街の中をみながら、歩いてゆく私はもはや此の世のことを考へず、さりとて死んでいったもののも考へてはゐないのです」

古井戸は、空を見上げた。

「みたばかりの死に茫然として、卑怯にも似た感情を抱いて私は歩いてゐたと告白せねばなりません」

曇天は、今にもくずれ落ちそうな気配だ。

寒い北風が吹いている。

冬はもう、すぐそこに來ていた。

了

（後書き）

古井戸課長と山野君シリーズ。2作目。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4455z/>

学校の怪談

2011年12月15日05時52分発行